

# 宗教者と信仰者についての一考察

おやさと研究所教授  
金子 昭 Akira Kaneko

## 宗教者という呼称

私は宗教関連のパネルなどに呼ばれると、宗教の研究者であると共に宗教者でもあると紹介される。そんなとき、私は一信仰者なのにと、面映ゆい気持ちになる。

そもそも宗教者とは何か。信仰者とはどう違うのか。この呼び方の相違にはさまざまな側面が考えられる。同じ人間を指す場合でも、宗教者と呼ぶときは、その客観的側面としての所属宗教に注目するのに対し、信仰者と呼ぶときは、今度はその主体的側面としての信仰の姿に注目しているようだ。

宗教者と言った場合は、とくにその所属する教団の代表ないし要職にある者を指していることが往々にしてある。私が自ら宗教者と名乗る気になれない理由の一つも、たしかにそこにある。宗教で生計を立てている職業的宗教者もいれば、本業は別に持っている非職業的宗教者もいる。前者の場合、時に揶揄をこめて宗教家と言うことがあるし、宗教屋と言ってしまえば、これは完全な悪口になる。

いずれにしても、宗教者という呼称には、その人の所属する宗教の立場やその教団の看板を背負っているという性格がある。宗教者は教団人と同義に使われることもある。そう呼ばれた本人もまた、教団のしかるべき立場やスポークスマンとして発言する傾向にあり、周囲の人々もそれを期待している節がある。しかし、教団の看板を意識しすぎてしまうと、きれいごとの公式見解しか言えなくなるきらいも出てくる。

それに宗教者という立場で語ると、自分は宗教を持たない他の人々とは違うのだという、なにか特権的な立場から物を言っている姿勢が見え隠れすることがある。これが宗教者の発言を上から目線として敬遠させてしまう要因になるのである。我々の側も、宗教のブランド名や教団内での肩書、さらに言えば外面的な功績や成功体験で、その宗教者を見てしまうとしたら、世俗的な物の見方とさして変わらない。私は、実を言うと、他の人が宗教者と呼ばれるときでも、どこか引つかかるものを感じることがある。それは、この言い方のために、最も実存的な主体性が期待されるはずの人間の発言が、その肩書や立場で糊塗されたり、功績や成功体験の話にすり替えられてしまうことに、危惧を覚えるからだ。

## 宗教もまた人間の作った枠組み

宗教者と非宗教者との相違をことさらに強調してしまうと、両者の間に最初から目に見えない境界線を引いてしまう。つまりそうすることで、逆に両者に通底する大切ななにかを断ち切ってしまうのである。宗教対話の集会などで、「宗教者と非宗教者の対話」という問題提起（前号参照）がなされるのは、うがった見方をすれば、宗教者という表現自体がそうした“溝”を掘らせているからではないかとすら考えてしまう。

そもそも宗教というのは人間の作った枠組みであり、世にある数多くの社会制度の一つとして機能しているものである。「宗教を信仰しています」という言い方がおかしく聞こえるのは、信仰の対象となるのが、本来、神や仏など絶対的で超越的な存在であるのに、人間の作ったそうした枠組みを信じているように聞こえるからである。こうした存在は、宗教という回路を経

ることで、教理や儀礼、教団組織という明確なシステムを持つことができ、宗教者はそのシステムに対応した形で、本当の自分を見出し、安心立命の境地を得て、他者とのつながりの道筋をつけることが可能になる。

ところが、そうした宗教の回路を経ることなく、それぞれの仕方で、本当の自分、安心立命の境地、また他者とのつながりの道筋をつける人々が現実で大勢いる。最近では、むしろ宗教という回路を経ない方が、より自分らしい仕方でそれらのものを得る人々が増えてきた。伝統宗教のみならず新宗教の教団離れや、そうした既成宗教に替わるスピリチュアルなものの隆盛も、ここから説明できるだろう。昨今のスピリチュアルブームにはどこか軽佻浮薄なところがあったり、時に危険なカルト的要素を帯びたものもあるが、そういうものを別にすれば、やはり絶対的で超越的な存在への志向が、宗教の場合と同様にスピリチュアルなものにも確かにあると言えよう。

## 信仰者という呼称

ただ、だからといって、私は、これからは宗教ではなくスピリチュアリティの時代だと言おうとしているわけではない。スピリチュアリティもまた、宗教と同じく人間による枠組みであり、超越的存在に至る回路の一つなのである。むしろ私は、どのような様式を取るにせよ、その主体的契機や人間の実存の姿に焦点を当てることのほうが大切だと考えるのである。私が信仰者という呼称にこだわりたい理由もそこにある。

信仰者という呼称は、所属宗教の看板や、ましてそこでの立場や役職とは関わらないのはもとより、スピリチュアリティという様式にすらこだわらず、純粋に絶対的で超越的な存在と関わる人間の実存的主体を表明することができる。そうすると誰もが何らかの仕方と度合いで信仰者であることになるし、宗教と世俗という図式を踏み越え、もっと深いところで対話や協働も可能になるのではないだろうか。

何らかの形で心の拠り所とそこに由来する使命感を持っているかぎり、どんな人間も信仰者であると思う。特定宗教の所属とは関係なしに、この世は神の支配、仏の加護の下にある、あるいは天地自然の理法に従っていると感じている。不正や悪がたとえびこっても、最後には正義や善が勝利するはずだ。どんな苦境に陥っても、自分は大いなる存在に守られ導かれていると信じている。こうした感覚や信念が信仰心の発露であり、信仰の様態である。それなら誰もが何らかの形で持っているのではないのか。

たとえ何らかの宗教に属する「宗教者」であっても、信仰の度合いや濃淡はさまざまである。信仰者だからといって、完全に信じていなくてもよい。たとえ半信半疑であっても、半分信じているほうにアクセントをおけば、すでにもう信仰者と言えるのではないか。

信仰者は、宗教・非宗教の境を超えて存在しうる。宗教者を信仰者と言い換えることにより、宗教者はもはや宗教者として登場する必要もなくなる。それと同時に、人々の間の対話の地平がぐっと広がり、またその次元もより深まっていくのではないだろうか。